

松本 慎也(1510057)

<序論>

研究動機・研究目的・研究方法

筆者は高校時代にハンドボールを始め、今年で7年目となる。この7年間で筆者のハンドボールは大きく変わった。そのきっかけは大学で「ボールにプレーする」ということを学んだことである。この「ボールにプレーする」ということを実践するチームは少なく、ディフェンスでは敵を接触プレーによりフリースローを獲得し防御するという方法が一般的である。しかし、秋田大学のディフェンスはボールを奪うことを目標としており、その目標を達成することで速攻での得点を増やすことができる。ハンドボールにおいてボールを奪うプレーには様々な方法があるが、その中でもドリブルカットというプレーに着目し研究を進めたいと考えた。ドリブルカットに着目した理由として、筆者の得意なプレーであるということがある。入学当初は、上手いかなかったが、日々の練習でコツをつかみ試合の中でも実践できるようになった。しかし、まだ失敗することもあり、確実なものとはなっていない。そこで自分のプレーを見直し、研究を深めることで、ドリブルカットの有効性を明らかにしながら、より確実にドリブルカットを行えるようにするため研究対象とした。

本研究の目的は、ドリブルカットの運動構造を明らかにし、類型化していくことである。その方法として、マイネルの運動学における運動モルフォロギ的考察方法のうち特に自己観察をもとに、印象分析を進めていく。その際映像は、筆者が大学3年と4年時に撮影した試合を使用し、その中でも、ドリブルカットが見られる場面を抽出し観察対象とした。

<本論>

第1章 ハンドボール競技の構造特性

ハンドボールはチームスポーツ種目に属し、ルールにしたがい2チームによって行われる競技である。ハンドボールのゲーム活動目標は、ボールを手で相手チームのゴールに投げ入れ、自分のゴールを相手の攻撃から防御することであり、定められた競技時間にあげた得点の多いチームが勝者となる。ここでは、ハンドボール競技の特性についてまとめ、さらにハンドボールにおける防御の個人戦術およびドリブルカットについてもまとめている。ドリブルカットは、防御のトップのプレーヤーによって用いられる。防御プレーヤーの前方の大きく離れていない場所で攻撃プレーヤーがボールを弾ませているとき、地面と相手プレーヤーの手の間の空中にあるボールに掌を開いて腕を入れ、相手プレーヤーからボールをカットする。手に触れたボールは手前に引くか、味方プレーヤーに向かって押し出し、ボールがより確実に味方ボールになるようにする。この技術は、非常に

大きい反応スピードとプレー・スピードを有する防御プレーヤーによってのみ非常に慎重さをもって用いられる。

第2章 ゲームの運動観察方法について

本研究では、ゲームの運動観察方法として運動モルフォロギ的考察法を重視している。また、それに加え、フィルム、ビデオによる観察法を用いて考察した。特に自己観察をもとに研究を進めていくが、自己観察は自分の運動を運動覚と言動によって知覚し観察することでスポーツ運動を本質的に完全に把握できる。ドリブルカットの本質を見抜いていく際に、マイネルの運動カテゴリーの中から、「運動の局面構造」、「運動伝導」、「運動リズム」、「運動の先取り」の4つ、さらに金子明友による「伸長能力」のとらえ方に基づいて印象分析をおこない、運動構造を理解していく。特にマイネルが取り上げた運動カテゴリーは、運動経過の本質を捉えるために必要なものであり、運動の理想像である正しい運動または上手な運動をおこなうために密接に関わってくる。さらに、印象分析の際には、より間主観的な運動観察をおこなうために「共同観察」によって進めた。

第3章 ドリブルカットの類型化

この章では、初めに、ドリブルカットの運動構造のとらえ方を図示した。次に筆者が大学3年と4年時に撮影したビデオから、ドリブルカットの場面を抽出し、それらの印象分析とその結果の考察をおこない、類型化を試みた。その結果、以下のようにドリブルカットを類型化することができた。

- | | |
|---|--------------------------------------|
| ①ノーマル型
—敵方向にはじく
—味方方向にはじく
—横にはじく | ②ドリブルをつかせる型
・ある程度の間合いをとりドリブルをつかせる |
| ④つめて敵についていきカット型
・横への移動に対してつめたままついていく | ③正面のボールをカット型
・正面でついたドリブルをカットする |
| ⑥まってカット型
・ほぼ動かず突破に対して待ち構えている | ⑤後ろからカット型
・後ろから隙をついてカットする |

<結論>

本研究では、ドリブルカットの運動構造について、その運動経過を質的に観察し、考察していくことで8つに類型化することができた。今回ドリブルカットについて類型化をおこなったことによって、それぞれのカットの特徴や構造体系について述べることもできたが、ドリブルカットをおこなうにあたって、構造体系を理解し、正しい運動を身につけていくことが必要である。また、「間合い」、「予測」、「伸長能力」、「方向付け」の4つを高めることでドリブルカットをより成功に繋げることができると考える。(引用・参考文献省略)